

## 第 10 回福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会議事概要

### I. 開催日時及び開催場所

日時：2015 年（平成 27 年）10 月 15 日（木）14:05～16:20

場所：富岡町教育委員会 郡山事務所 大会議室

### II. 委員

別紙の通り

### III. 資料

【資料 1】福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会委員名簿（H27.10.15 版）

【資料 2】福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会（第 9 回）議事概要

【資料 3】平成 27 年度双葉郡教育復興ビジョン年間カレンダー

【資料 4】双葉郡教育復興ビジョン取組体制

【資料 5】個別取組の実施状況

【資料 6】広報誌「ふたばの教育」秋号（最終原稿コピー）

【資料 7】福島県内の双葉郡児童生徒向け学習支援拠点案内（案）

【資料 8】生涯学習政策関連予算 説明資料

【資料 9】ふたば未来学園初年度前期の取り組み（概要）

【資料 10】福島県双葉郡中高一貫校設置事業および双葉郡教育復興推進事業に関する資料

### IV. 会議概要

#### 1. 開会

<挨拶（大熊町・武内教育長）>

今年度も後半に入り、震災と原発事故で避難して 4 年 7 か月が経った。復興は進んでいる一方、双葉郡の困難な状態は続いている。

本年 4 月、ビジョンの具現化の一つとして福島県立ふたば未来学園高校が開校した。以来半年が経過し、順調にその帆を進めているようで嬉しく、また力強く感じている。そして 8 月 26 日には、福島県教育委員会と双葉地区教育長会が合同で文科省への要望活動を行い、共に双葉郡の教育復興に当たっている姿を国にも分かっていたいただけたと思う。

大震災から 4 年半、ビジョン策定からも 2 年以上が過ぎた。こうした状況を踏まえ、双葉郡の教育復興に何が大切か、私たちが目指す学力とは何かをもう一度確認しながら、ビジョンの具現化に努めていくことが肝要と思う。サテライト校で学ぶ生徒たちも視野に入れ、小中学校で学ぶ子供たちの教育の質の向上、区域外就学の児童生徒へのきめ細かな活動にも引き続き取り組んでいきたい。

<新委員紹介>

- 文部科学省大臣官房審議官 伯井美徳様
- 復興庁福島復興局次長 岸本道弘様

<配布資料確認>

<前回協議会議事概要の確認>

## 2. 議事

### 1) 取組について、平成 27 年度上半期の実施概要、成果や課題と下半期の予定

#### (1) 協議会の活動全般について【資料 3】

- 個別取組の推進体制、スケジュールは年度初めの予定通りに進捗。現場の先生をメンバーに加えた委員会で企画・運営を行っているため、子供たちの現状や現場の意見を反映した取組になっている
- 外部講師による授業実施。ふたばの教育復興サポーター・秋本真吾さんによる出前授業、広野中でのキャリア教育授業など。各町村の小中学校では、独自に地域の方々や様々なテーマに関する専門家、指導者などを積極的に招き、児童生徒への指導を行っていただいている
- ふたば未来学園高校と双葉郡 8 町村立中学校の連携型中高一貫教育のスタートに伴い、中高連携協議会を設置。6 月 12 日に第一回連携協議会開催、8 月 20 日に中高交流会実施、11 月 13 日には第二回連携協議会開催予定。
- ビジョンにもある「ICT 活用」を進めるため、Google のパブリッククラウドサービスの試験運用を双葉郡内各校で開始。ICT 活用推進委員会を新たに設置

#### (2) カリキュラム検討・教員研修【以下個別取組について、資料 5】

- 昨年スタートした「ふるさと創造学」が軌道に乗ってきた。同時に課題も出てきている。
- 教員研修は、郡内の小中学校およびふたば未来学園の教員を対象に開催。5 月 1 日に兵庫教育大学の日渡先生を招き、2 年目を迎えた「ふるさと創造学」の位置づけの確認や、より充実した内容に向けたワークショップ形式の教員研修を実施
- 5 月 28 日、ふるさと創造学を担当する教員が集まり、単元のブラッシュアップにむけた文科省・田村視学官からの講義とワークショップを行った。田村視学官には、ふるさと創造学の立ち上げから関わっていただき、双葉郡内の教員の指導力向上に寄与していただいている。今後も引き続きご指導いただきたい
- 今後の予定。総合的な学習の時間を中心に取り組んでいる「ふるさと創造学」であるが、アクティブ・ラーニングで目指す思考の活性化のための取組であり、教科での展開を見据えた授業研究会を 11 月 6 日に予定している。1 月には教職員による子供未来会議、また、次年度に備え「ふるさと創造学」の定義をまとめていく
- (半谷教育長)「ふるさと創造学」の定義固めを今年度の取組事項に入れていることについて。昨年始めるにあたって、探究型の学習を通じて地域に関する学びを進める、何を扱うかは学校の実態に合わせればよいということで定義できているものと認識していたがそれでは不十分、あるいは異なる定義をするのか。→ (畠山教育長) 基盤は当初のとおりだが、進めていく過程で再整理が必要と考えている。ふるさとや自分のアイデンティティという認識の中で、思考を活性化して課題を見つけ解決方法を探っていくような、ふるさと学習における再確認の必要性という意味。→ (半谷教育長) 再確認の必要性や

手探りの状態は認識している。年度末で再確認や整理をしていくべきと考える

### (3) 情報発信・コミュニケーション

- 現場教員等で組成した委員と事務局山中コーディネーターで進めている
- 広報誌、双葉郡の全町村の全戸に配布する（約3万8千部）。前年3号発行したものをリニューアルし、子供たちや学校の今を伝えるため、現場の教職員がテーマを検討し取材・記事作成などを行うという方針で制作。今年度は、秋・春の2回発行を予定
- 協議会ウェブサイト。時間の経過とともに、各校の活動や子供たちの様子などを発信するウエイトが増している。折々に話題をアップしているのは是非ご覧いただきたい
- 情報を一方的に発信するだけでなく、双方向のコミュニケーションに発展させることを検討し、今回の広報誌には「返信用の便せん」を付けるという初の試み。Googleのシステムを利用するなど、いろいろと工夫していきたい

### (4) ふるさと創造学サミット

- 第2回ふるさと創造学サミット、12月12日（土）郡山市立中央公民館にて開催予定
- 各校の「ふるさと創造学」の取組経過・成果の発表、意見交換と交流を行うため、ポスターセッション形式をメインとする内容を予定
- 目的は、1. 「ふるさと創造学」の成果発表を通じ子供たちの表現・発信力を高める、2. 双葉郡内各校共通の取組を地域に発信し地域の復興に資する、3. 子供同士が交流し、町村・校種を超えて協働で学ぶ場をつくる。今年度の目標は「子供たちが共に行動し、考え、創造し、ふるさとふたばをつなぐサミットの開催」
- 以上の内容を、2回の実行委員会で相談して決定した。委員は、教育長のほか、相双教育事務所や校長会、現場教員に、外部アドバイザーも加えて組成
- 委員の先生方からは、サミットをその場だけの行事でなく、自校に持ち帰り次につなげることで、表現力や課題解決力を高めるなど子供たちが成長する場としたい、との意見があり、各校で取り組んでいるのと同時に、委員のほうで準備を進めている

### (5) 他地域交流事業

- 他地域交流の目的は、1. 地域に関わる人々と交流することで、他地域の課題や取組の工夫を知り、思いや考えに触れる、2. 自分自身の生き方を追求し、地域の発展への視点を育む、の2つ
- 教育長2名と現場の先生3名による委員会を設置し、企画や当日運営等を行った
- 島根県立隠岐島前高校・福島県立ふたば未来学園高校との交流（9/20～23）。交流会、フィールドワーク、シェアリングセッション等を通して、広野町や川内村の方々の話を伺ったり、高校生同士が学校生活や地域課題への取り組みについて話し合ったりした。意欲的に参加していた様子が見られ、大変有意義であったと感じている
- 福井県鯖江市訪問（10/10～12）。現地団体との交流や市長や教育長の講話、JK課インターン、フィールドワークなど
- 海士町、鯖江市との交流で得られた成果の共有や継続、研修による生徒や教員の意欲の高まりを感じている
- （畠山教育長）サテライトの生徒が参加してくれたのがとても良いと思ったが狙ったのか。→（半谷教育長）初めからサテライトにも声をかけた

**(6) 双葉地区学校支援地域本部**

- 前回協議会で、組織化に向けた経緯を説明し了承をいただいた。6月4日に立ち上げ会を広野町で行った。同時に地域による子供未来会議を開催し、東山田コミュニティハウス館長の竹原氏によるコーディネーターや地域の方とのワークショップを行った
- 8町村を包括した形で、メンバーは各町村の地域コーディネーター、小中学校の教職員を代表する方、未来学園、教育委員会、教育長など。8町村の小中学校およびふたば未来学園の支援をしていきたいという目的で設置
- 各校への外部講師の招聘や、他地域交流でのフィールドワーク先との調整などを各町村の地域コーディネーターや学校、事務局のコーディネーターで連携して進めている
- 外部講師招聘について、小泉応援団が各小中学校まで回りきっていない実態は、今後の課題として一度報告すべき、と教育長会で確認したので報告する
- (大沼課長) 未来学園が地域本部とつながっているということだが、サテライト校も加えてもらえないか。→ (秋元教育長) 学校の求めに応じてということなので、何ら差し支えはない

**(7) コミュニティ復興拠点検討会**

- ふたば未来学園の校舎の一部に設置ということで検討会を実施。外部より、東北大学院の小野田先生、横浜市の東山田中学校のコミュニティハウスの竹原先生なども参画
- 5月に検討会と実務者会議。教育長は富岡町・石井教育長と川内村・秋元教育長が参加。その後の実務者会議は県教委が中心となって進め、8月末には公開プロポーザルがあった(※議事3の(2)参照)

**(8) 絆づくり・学習支援/WG3**

- WG3会議を6月19日開催。絆づくり交流会(小学校)の開催について、ならびに、学習支援拠点についての情報整理と発信について協議した
- 8月20日の絆づくり交流会、児童99名、教職員76名、ボランティア・関係者63名参加。目的1. 8町村小学生による学校の垣根を越えた仲間づくり、2. 教職員の情報交換
- 支出につき、多くは免除や寄付により賄われた実情があり、財政的なことでは来年度に向けた課題があると認識
- アンケートや児童寄せ書きを見ると、大変好評でぜひ来年度もという声が多い。9月28日に開催したWG3会議で、来年は8月10日にビッグパレットでの開催案を策定した。この協議会で承認を得たい
- 学習支援拠点。昨年度要望についてのアンケートを実施。7月にいわき好間に大熊町の放課後学習会がスタート。いわきだけでなく、県内全域で開かれている双葉郡の子供受入可能な学習支援拠点について、「双葉郡の友だちと一緒に学ぼう」チラシを広報誌と合わせて11月に配布予定

**(9) 福島大学による支援活動について**

- 大学としての支援方針。福島大学は双葉郡と復興に関わる協定を結んでいるので、それに従って引き続き対応。9月に教育長会による要望活動があり、学長からは協議会や校長会の活動に対して注目していること、ふたば未来学園が開校し一層の8町村の連携的な取組に期待している、高大接続についても積極的に協力、という話があった

- 具体的な支援活動としては、COC 事業に基づき、地域と連携した活動を行っている。うつくしまふくしま未来支援センターでは、大学のアカデミックな英知を地域に提示させていただくという展開。人間発達文化学類としては、震災直後からボランティア活動はさかんに行われており、双葉南北小の運動会サポート、12 市町村将来像に関する未来会議への参加、町による再会の集いや小学校絆づくり交流会、ふたば未来学園高校の定期試験に合わせた学習支援、など
- 教員も県とコミットする必要があるだろうということで、ふたば未来学園高校教員向けの研修会もスタートしている

#### (10) その他質疑応答・全般まとめ

- (秋元教育長) 各報告からビジョンが具現化してきたことが分かる。同時に協議会や事務局の役割が大きいということ。様々な復興支援制度によって支えられてきたが、その先には自立、ということがある。協議会も持続可能な組織を目指していくべきであり、法人化の検討を進めていくと年度初めに確認されたが、カレンダー等には記載がない。なにかやっているのか、あるはやろうしているのか→ (武内教育長) 法人化については 4 月以降、関係者と話し合っているが、法人を作るだけで持続可能な組織となるのかという問題もある。一番は財源で、法人化したから資金が得られるということでもない。自立を目指して進んでいくのであれば、財源も自分たちで確保する必要があると思っている。ビジョンをもとに、双葉郡の子供たち、双葉郡の学校という視点でやってきた。学校支援をするとき、必要最小限は 8 町村でやり、足りないところは県や国、その他外部に支援を求めるというステップが必要ではないかと考えている→ (補足・中田教授) 事務局の自立化ということについて課題があるという確認はさせてもらっている。検討ステップも含め、模索し準備する段階。課題の把握と論点の整理について、いくつかのポイントがある。情報を収集しながら改めて議論いただく機会が設けられるという理解→ (秋元教育長) 情報提供として承った
- (全会) (1) ~ (9) で報告された内容を受け、下半期および来年度に向けて示された計画案について承認

## 2) 双葉郡教育復興ビジョン推進協議会の次年度以降の計画について

### (1) 「福島県双葉郡教育復興推進事業」予算(概算要求中)について【資料 10】

- 福島県双葉郡中高一貫校設置事業 (H27 年度予算額 590,974 千円、H28 年度概算要求額 2,625,279 千円)
- 福島県双葉郡教育復興推進事業 (H27 年度予算額 37,045 千円、H28 年度予算(案) 48,535 千円)。双葉郡中高一貫校における事業ならびに双葉郡内の小中学校等における事業についての予算を予定

### (2) 生涯学習政策関連予算について【資料 8】

- 「学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生支援事業」からの変更。被災 3 県で仮設住宅のある自治体を対象とする。子供の学習支援や体験学習に関するものに限定(大人が参加してはいけないというものではない)。また、評価検証委員会を設置して、目標を設定して効果測定をしながらやっていく。双葉郡の活動については、これまでと同じ規

模で進めていただける予算ではないかと思っている

- (武内教育長) 評価検証委員会というところだが、人数だけで評価していただかないようお願いしたい。学習支援の場として、双葉郡としていわきに3カ所設置している。ここにきて本当に助かっている子どもがいる。いわき市に双葉郡の子供たちが1500名以上いるが、フリースクールは市内でいっぱいとも聞いている。逆に、大熊町で開設したフリースクールにいわき市の児童生徒を受け入れている。国と地方公共団体で連携しながら、地域の現状を勘案した処置がとれるようにしたい
- (大類課長) 福島県内、いわゆるみなし仮設があり、完全に避難者がいないのは4町村程度。そういった福島の事情にも配慮して、幅広く支援をお願いしたい→(徳田審議官) 国としても支援を限定するのが目的ではないので相談しながら進めていきたい

### (3) 協議会の取組・体制方針について【資料無し】

- 基本的には、福島県双葉郡教育復興推進事業の予算に従い、今年度の取組を継続・発展するというのが基本路線。そのための体制づくり。今年度は、現場主体の委員会制度を開始している。その実態や効果が確認されつつあるので、この体制を維持継続しながら今後の準備を図っていきたい。
- 来年度は、現場主体の体制に移行しながら、8町村の教育長の役割を、全体的な方針の検討や決定というところにウェイトを置いていただき、そのもとで実行委員会を機能させるような仕組みで進めてはどうか
- 将来的な協議会の事務局体制についても、検討していかなければならない
- ふたば未来学園高校の中高一貫校に向けた高校の充実、双葉郡内の学校の横と縦の連携をさらに充実させていく必要がある。ふるさと創造学を中心としながら、双葉郡ならではの教育を確立していくということを重視し、子供たちの成長を図り、絆を作っていく
- こうしたことを継続しつつ、ビジョン推進計画書については継続検討をし、実態に合わせた文書化を進めるという課題は残っている
- (全会) 上記のような方向性で了解

## 3) その他

### (1) ふたば未来学園高校の状況について【資料9】

- 課題は一人ひとりの生徒たちを支えていくことであるが、半年の実感としてやはり簡単ではない。被災体験や厳しい家庭の状況のなかで育っており、10年、20年支えていかないといけないと感じている
- 生徒の学力に幅があり習熟度別5クラスに分けた課外授業を行っている
- 地域の課題を演劇で表現する授業を30時間かけて行った。課題を直視して言語化することは入学時ほとんどできなかったが、やればできるようになり、ベラルーシや広野町国際フォーラムで披露した
- OECD東北スクールとの連携で、地方創生イノベーションスクールにおける実践的学習に取り組んでいる
- 隠岐島前高校とは今後も密な連携をとということで連絡を取り合っている

- 応援団による「共同責任編集」授業は生徒の成長が見られる。先生方も一緒に取り組み、指導法の研修にも生かすことを目指している。カリキュラム開発、カリキュラムマネジメントならびに教員研修も進めていく
- サテライト校との交流。ふたばワールドに出展するなど交流の機会を重ねている。伝統を引き継ぐということで力を入れてやっていきたい
- (半谷教育長) 組織の力、従来の価値観とは異なる物差し、現場の発送と取り組みが必要なのでは、と思った

## (2) 双葉郡中高一貫校整備事業計画について【資料無し】

- H28 年度 26 億円の概算要求していただいている。本設校舎 (H31.4 月スタート) に向けて、併設中学校を含んだ基本計画の練り直しのための実務者レベルの会議を 6 月に開催し、アドバイザーに東北大学小野田教授を迎えた
- 7 月 7 日基本設計・実施設計の委託業務選定のための委員会立ち上げ (委員 7 名)。募集に対しては、7 者から応募があり、8 月 17 日の一次審査で 5 者へ絞り、8 月 31 日の二次審査プレゼンで最優秀提案者を決定。9 月に契約締結
- 選定されたのは、福島の建築家による設計共同体。木造で低層の建築コンセプト。校舎、運動場、敷地内の施設をつなぐエデュケーショナルコンコース (ECC) と呼ぶ回廊のようなものを設置するという案
- 県教育庁および土木部と設計共同体で月 2 回のミーティングを開催し、綿密なコミュニケーションのもと進めていく。今年度末までには基本設計を仕上げるべく、県が深く関わる体制。また、ふたば未来学園の生徒参加のワークショップを開催予定
- (中田教授) プロポーザル選定プロセスに参加させてもらった。非常に熱意のある設計チームだったという印象

## (3) その他

- (荒井委員) この 3 年協議会は開くことをし続けてきた。マスコミへのオープン、地域や子どもへ開く、など。教育界としては開いていると思う一方で、各町村では教育と他の業界が開ききっていないところがあるように思う。来年度以降、体制含めて見直すということなので、地域とどう開くかという流れになると、より良いのではと感じる

## 3. 閉会 (福島大学・中田教授)

今後の協議会がどこに開いて連携を進めなければならないか、行政、大学、教育委員会、民間も含めて開いていくことを視野に入れ、体制図が描かれている。重層的に展開して、スパイラルのようにお互いが関連しながらビジョンを進める形が動いていることを実感する。

これらの成果のさきふたば未来学園がスタートしている。多様な生徒がいて、大変な小中学生時代を過ごしてきた子も多いが、ここで自分をリスタートさせようとしていると感じる。一期生としてどのように文化をつくっていくのか、そこを含めてチャレンジしている。同様に、「ふるさと創造学」を含め、新しい教育にイノベーションを起こそうとする我々の取組がスタートしている。その継続と展開を温かく育てていくために、皆さんの協力を引き続きお願いしたい。

以上